



## 名誉会員 木村敏雄先生を偲ぶ

本会名誉会員木村敏雄先生が2019年10月11日永眠された(享年97歳)。

先生は1922年九州小倉(現北九州市)にお生まれになり、小倉中学校・第一高等学校を経て1941年東京帝国大学理学部地質学専攻入学、1943年卒業後直ちに大学院に進学された。しかし同日付で海軍技術見習尉官となり、翌1944年海軍技術中尉、1945年大尉として南方戦線に赴かれた。1946年復員後大学院に復学、翌1947年には東京帝国大学理学部助手となられた。1950年には新設間もない名古屋大学理学部地球科学科に助教授として赴任、7年間奉職されている。この名古屋時代に結婚された。1957年東京大学教養学部助教授として戻られ、1962年理学部地質学第二講座の教授となられた。1982年に定年退官、名誉教授になられたが、この間、学術の世界では、国際地質学連合委員、IGCP国内委員会委員長や日本学術会議研究連絡委員会委員等々を歴任、政府関係委員としては、科学技術会議専門委員や原子力委員会委員等も勤められている。

先生のご経歴で特筆すべきことは教授就任の際、構造地質学講座を新設されたことである。東京大学理学部地質学教室は5講座からなり、第二講座は主として中生代の地質学を、第四講座は主として新生代の地質学を担当していたが、これを改組して、第二講座は構造地質学、第四講座は古生物学と明確に分けたのである。まだTectonophysicsもJournal of Structural Geologyも創刊されていなかった頃のことである。

恩師の小林貞一先生との共著論文は化石に関するものだが、構造地質に開眼したのは、名古屋大学時代、上司の松澤勲先生に滝原衝上断層の研究を勧められたのがきっかけだったらしい。名古屋時代は豊かな実りの多い充電時代だったと述懐しておられたが、徹底的にフィールドエビデンスに依拠すること、顕微鏡観察も駆使して岩石を識別し、小構造も克明に記載すると共に、マッパブルな大構造との関係も吟味することといった研究スタイルを編み出された。東京大学に戻られてからはこの小構造解析・構造階層(構造層準)といった手法を武器に数々の業績を挙げられていく。教授時代の半ば、石灰岩を除き無化石と考えられてきた秩父帯や四万十帯からコノドントや放射虫

等の微化石が発見されたのを契機に、地質構造発達史の方向に大きく舵を切られた。その集大成が『日本列島』[Geology of Japan]『日本の地質』として結実した。ご定年後も学問的情熱は衰えず、弟子たちに誤ったことを教えたかも知れないとして、『日本列島の地殻変動—新しい見方から』という大著を出版、弟子たちに配付された。なお、木村先生はプレートテクトニクスに反対だったとの説がある。しかし先生は、原理原則は認めておられ、悪乗りしてスペキュレーションに基づき安易にモデルを提唱する風潮を戒めておられたに過ぎない。また、教授時代後半からご定年後にかけて応用地質学・災害地質学にも携わられた。

次に先生のお人柄と教育者としての側面に触れてみたい。冒頭述べたように、先生は小倉出身、根っからの九州男児である。大声で議論し、豪快に笑い、頭から湯気を出して叱り飛ばし、斗酒を嗜む。小柄な方だったが、大人の風貌があった。一方で、学生の暮らし向きまで心配する心優しい側面もお持ちだった。

私は教養学部時代、地文研究会というサークルに入っていた。地学教室を部室とし、教室スタッフは全員顧問のような仲間のような関係である。地理・地質・天文・気象と4班あり、夏休みの研究成果を秋の駒場祭で発表する。地質班は丹沢の地質調査をすることになった。木村先生から、「文献など一切読まず、曇りのないフレッシュな目で見てきてごらん」とアドバイスをいただいて出発したが、地質学科の学生でもないはずの素人、足柄層は礫岩一色である。一色ではみともないので、白い石英閃緑岩礫の出る層と出てこない層に分けてみた。帰学後、先生から、「でかした、キミは丹沢山地の隆起侵食の過程を明らかにしたのだよ」とおだてられ、「物言わぬ石に何を語らせるのが、その地質屋の力量なのだ。僅かな証拠を丹念に積み上げ、何億年も前にどのような現象が起きていたのか、鮮やかに描き出してみせるのが地質学だ」といったお話があった。

そのため、探偵みたいで面白そうと、うかうかと理学部地学科地質鉱物コースに進学してしまった。4年次には講座配属、駒場(教養学部のこと)以来のご縁で、私唯一人が新設構造地質学講座を選んだ。卒論フィールドは気仙沼、テーマは何と、「造山運動を生層序ではなく変形という目で見直せ」である。教養学部から移ったばかりで手加減をご存知なかったのだろう。あるいは「学生は自分の足元を脅かすライバルである。敵に塩など贈れるか。ボクは越後人じゃない」「教師と学生は教える者と教わる者として向き合う関係ではなく、真理に向かって肩を並べる関係なのだ」と言っておられたこともあるから、4年生でも一人前の研究者として扱ってくださったのかも知れない。不整合を境に変形様式に違いがないかとくに注目して観察したが、どうも褶曲の様式は漸移しており、中生代を通じて一貫して同一の応力場だったらしいとの結論を得た。木村先生は北海道大学の湊正雄先生に「本州造山運動などない。岩松君がとくに明らかにしている」と私の知らないところでケンカを売られ、大変ありがた迷惑な事態になったこともある。

ご引退後も時々ご自宅にお邪魔したが、知的好奇心は衰え知らず、国内外の学界の動きはもとより、政治情勢から文学まで、滔々と弁じてやまないのが常のお姿だった。一言で言えば、古き良き時代の大教授であった。

一つの時代が過ぎ去ったことを実感する。心からご冥福をお祈りする。

(岩松 暉)